

所在不明の広島県出土銅鐸に関する新たな情報を発見!!

現在も所在不明となっている、江戸時代に福山藩内で出土した銅鐸について、最近まで鳥取県に所在したことが研究者の調査で分かりました。

詳細は、当館が行う講演会と夏の企画展で紹介します。

1 新発見の内容

当館が所蔵する重要文化財「菅茶山関係資料」の中に、弥生時代の銅鐸の拓本があり、「文化十年」(1813)に現在の福山市神村町の方福寺谷(県立松永高等学校敷地を含む一帯)から出土したことが記されています。その後、実物は所在不明となっていました。昨年5月に、難波洋三氏(国立文化財機構奈良文化財研究所客員研究員)の調査で、昭和26～28年に鳥取県在住の個人が所有していた銅鐸が、福山市神村町出土のものと同一であることが判明しました。

2 発見の意義

この銅鐸は、現在も所在不明のままですが、拓本・写真・実測図が残されており、当館所蔵の拓本だけでは分からなかった情報が読み取れ、福山市神村町から出土した銅鐸の実態が明らかになりました。

3 当館で実施する新発見紹介

(1) 講演会

今回の新発見の経緯などについて、難波洋三氏が当館で講演します。

- ① 日時 7月27日(土) 午後2時～3時30分
- ② 場所 ふくやま草戸千軒ミュージアム(広島県立歴史博物館) 地下講堂
- ③ 講演者 難波洋三氏(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所客員研究員)
- ④ 演題 福山方福寺谷銅鐸(神村銅鐸)の新資料と広島県内出土銅鐸
- ⑤ その他 定員280名 聴講無料 申込不要

(2) 展示【夏の企画展「名宝が織りなす歴史物語 ー広島県の国宝・重要文化財Ⅳー」】

7月12日(金)から開催の夏の企画展で、当館所蔵の銅鐸拓本(実物)とともに、鳥取県で発見された銅鐸の拓本・写真・実測図の写真をパネル展示し、詳しい検討結果を紹介します。

(展示会では、広島県内出土の銅鐸を全て(2点)展示します。なお、展示会の詳細はチラシを御覧ください。)



X(旧 Twitter)
発信中!!



〒720-0067 広島県福山市西町二丁目4-1
(TEL) 084-931-2513 (FAX) 084-931-2514
(e-mail) rhksoumu@pref.hiroshima.lg.jp

【新発見内容の詳細】

1 行方不明となった銅鐸

- (1) 当館所蔵の重要文化財「菅茶山関係資料」の中には、弥生時代の銅鐸の拓本2枚（下の写真はそのうちの1枚）と略図が3枚あり、「文化十年」（1813）に「神村萬福寺故趾之山脚」で出土したと記されています。
- (2) 「神村萬福寺故趾」は、現在の福山市神村町の万福寺谷（県立松永高等学校敷地含む一帯）と推定されています。
- (3) 拓本が取られた後、銅鐸がどうなったのかの記録はなく、実物の所在は現在も不明となっています。

2 鳥取県に所在したと判明した経緯

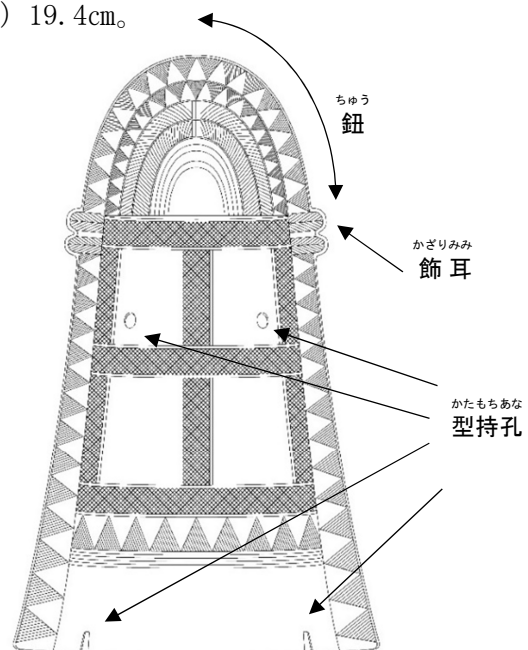
- (1) 鳥取県史編纂のため、鳥取県立公文書館は県内出土の青銅器の調査を国立文化財機構奈良文化財研究所に委託しました。同研究所の難波洋三氏は銅鐸を担当し、公益財団法人東洋文庫（以下「東洋文庫」という。）に収められている八頭郡八頭町破岩出土と伝わる銅鐸拓本などを調査しました。
- (2) この資料は、昭和26～28年、鳥取県在住の人が、個人所蔵の鳥取県八頭郡八頭町破岩出土と伝わる銅鐸の写真や拓本、図を、銅鐸研究の第一人者であった京都大学名誉教授の梅原末治氏に送ったもので、梅原氏の死後、東洋文庫が管理しています。
- (3) 難波氏は、当館所蔵の江戸時代の拓本と東洋文庫にある拓本や写真を比較し、よく似ていることに気付きました。さらに調査を進める中で、大きさや模様、型持孔の形や位置、後世の割れの痕跡などが一致することなどから、両者は同じ銅鐸で、江戸時代には福山藩にあった銅鐸が、何らかの理由で鳥取県に伝わったものと考えました。
- (4) 銅鐸が移動した時期や経緯について、鳥取県立公文書館や当館でも調査を行いました。現時点では分かっていません。また、現在も所在不明のままとなっています。

3 銅鐸の詳細

- (1) 1対の飾耳を持つ四区袈裟襷文銅鐸（1対耳四区袈裟襷文銅鐸）
- (2) 外縁付鈕2式と呼ばれる段階で、弥生時代中期後半頃（今から約2200～2400年前）の製作とみられる。
- (3) 銅鐸の大きさは、高さ32.9cm、最大幅（下端部分）19.4cm。



神村出土銅鐸拓本
（重要文化財菅茶山関係資料）当館蔵



銅鐸模式図